

論文

授受表現における一人称の明示性について

A Study of the Specification of the First Person in Japanese Giving-and-Receiving Expressions

朱 炫姝 (Hyunju JU)

筑波大学大学院人文社会科学研究所 博士後期課程

本稿は授受表現における格情報の明示と省略について、情報構造の観点から考察したものである。授受表現は視点の制約によって話し手と主格名詞句、与格名詞句の関係が決まっている。そのため、話し手自身が授受表現の経験者として関わっている場合、一人称で示される格情報は推論可能であり、省略が可能となる。しかし、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』に見られる授受表現の格情報を調査すると、一人称の格情報は必ずしも省略されるのではなく、むしろある文脈効果を狙い、明示されるケースがあることを指摘した。本稿の主張は、①授受表現における一人称を表す格情報の明示が構文的に必要とされる条件として、他のトピックとの階層性をもたせることと、授受表現の後接文にまで、トピックとして働き続けることがあり、②確認可能性が高い一人称の格情報の明示による文脈効果として、他のトピックとの対比、限定による卓立性を持ち、話し手自身の存在を活性化させる効果が話し手の伝達態度につながるという2点に集約される。

In this paper I consider the specification of the case frame in giving-and-receiving expressions from the perspective of information structure. Because one can infer the relationship between the speaker, the nominative, and the dative from the restrictions on point of view in giving-and-receiving expressions, the case frame that represents the speaker himself is both restorable and omitable. However, from an examination of the case frames in the BCCWJ (Balanced Corpus of Contemporary Written Japanese), I point out that there are some cases in which rather than being omitted, they are explicitly specified in order to achieve a certain contextual effect. In this paper I have two major contentions. Using the concept of “the topic,” the first is that the specified case frame is used to express a topic and has a contextual effect of activating the information. And, I explain that a topic has a hierarchy and continuity and can function as a topic over more than one sentence, and topics with a higher position in the hierarchy have a longer range. The second is that expressions that co-occur with the activated case frame have a subjective characteristic of expressing an utterance attitude on the speaker himself.

キーワード：授受表現 格情報 主格・与格名詞句 復元可能 トピック

Keywords: Giving-and-receiving expressions, Case frame, Nominative/dative noun phrase, Restorable, Topic

はじめに

本稿は現代日本語授受表現¹⁾において、聞き手による復元可能な格²⁾情報が明示されることに注目し、情報構造の観点からの分析を試みたものである。授受表現の基本構造は「主格＋与格＋本動詞＋接続助詞『て』＋授受動詞」である(宮地 1965、久野 1987、山岡 1990、山田 2004)。本動詞としての用法は「主格＋与格＋対格＋授受動詞」の構造を持ち、主格、与格、対格を必須格³⁾とする三項述語である(角田 1991:90-94)。一方、授受補助動詞用法において、対格は本動詞による任意格⁴⁾であり、授受補助動詞用法は主格と与格の二項述語の構造を持つ。本稿では、このような二項述語の構造が、実際どのように表されているかに注目する。

このような授受表現について、以下のような使用例が挙げられる。

1) (Yahoo!知恵袋の書き込み)

iTunesに入れるにはどうすれば良いのでしょうか？教えてもらえる⁵⁾と助かります。

(『現代日本語書き言葉コーパス』)

2) (Yahoo!知恵袋の書き込み)

さっきホラー映画見たので怖くてトイレに行けません。だれかこんな僕に勇気を分けてくれ!!

(『現代日本語書き言葉コーパス』)

例1)の「教えてもらえると助かります」のように、主格名詞句と与格名詞句が明示されない時がある。ここで主格と与格の情報が省略できるのは、授受表現の視点の制約、参与者間の共感度⁶⁾関係、文脈から読み取れる状況より推測できるためである。言い換えると、聞き手が明示されていない格情報を認識できるのは授受表現の構造に格情報がすでに示されていることが一つの要因である。しかし、例1)と同じくネットに書かれた依頼文として授受表現が使われたケースでも、例2)のように復元可能であると思われる格情報「こんな僕に」が明示される時もある。「誰か勇気を分けてくれ」と発話していることから聞き手(ここでは書き手)である人物に向かっての言葉であることが分かるにも関わらず、なぜ「こんな僕に」と与格名詞句の情報が明示されているのであろうか。復元可能な情報については数多く研究がなされているが、省略してもいいとされる格情報が明示される際に得られる効果について分析した研究は管見の限り少ない。

そこで、本稿では復元可能な格情報が明示される際に生まれる文脈効果について情報構造の観点からの考察を試みる。話し手は、聞き手とのコミュニケーションにおいて、伝達しようとする情報を適切に管理し、価値のある情報のある言語形式を使って表そうとしている。情報管理の面から見ると、述語に授受表現を用いることで、主格名詞句と与格名詞句の関係と、話し手の視点に関する情報を含

¹⁾ 授受表現については「受給動詞」「授与動詞」「やりもらい表現」「受益構文」など様々な用語で研究がなされているが、本稿では「本動詞＋接続助詞『て』＋授受動詞『やる・あげる・さしあげる(以下、「～てあげる」系)／くれる・くださる(以下、「～てくれる」系)／もらう・いただく(以下、「～てもらう」系とする)』」の表現形式に限定する。今回の調査では、「ご教示(を)いただく」のような「動作性名詞＋(を)＋授受動詞」の形式は対象外とする。

²⁾ 「格」とは語と語の意味的關係を表すものであるが、本稿では授受表現と主格名詞句・与格名詞句との関係について述べる。格の種類を「ガ格」「ニ格」と呼ぶ方法もあるが、助詞の形式に限らず用法によって様々な助詞が使用されることが分かった。そのため、本稿では「主格」として、動きの主体を表す「が」「で」「から」を含み、「与格」として、動作の対象を表す「に」「のために」「の代わりに」「を」を考察の範疇に入れた。

³⁾ 必須格とは、述語を補うために、必ずなくてはならない要素である。言い換えると、ある述語には特定の必須格が含意されると言える。

⁴⁾ 「来る」「寝る」等、対格を必須格としない動詞を本動詞とする授受表現の文では対格を必要としないため、任意格となる。

⁵⁾ 例文の下線は筆者によるものである。以下、同様である。

⁶⁾ 久野(1987:153-163)の共感度の概念を援用して視点の制約を表しているが、各授受表現において以下のような視点の制約がある。

i) テヤル E(主語) > E(非主語)

ii) テクレル E(非主語) > E(主語)

iii) テモラウ E(主語) > E(非主語)

めることになる。本稿では、特に、話し手自身を表す格情報に焦点をあて、話し手と聞き手の両方が認知していると思われる情報の明示が、どのような効果を生み出しているかについて明らかにする。本稿では、談話的アプローチを通じ、従来の構文的な研究のみでは明らかにすることができなかった復元可能な情報の明示に関して新たな解釈が期待できる。

本稿では、第1節で情報構造の観点において理論的な土台となるトピック概念と復元可能性について概観し、第2節で、本稿の立場として授受表現における構文要素と、情報構造の解釈の仕方、研究方法とその範囲について記述する。そして、第3節では、コーパス調査から得られた分析結果として、授受表現における構文的要素の出現傾向について、本動詞の分類分析を行い、主格名詞句と与格名詞句の明示・省略の傾向を分析し、使用の様相を明らかにする。第4節では、第3節の結果として得られた一人称の格情報を含む授受表現の談話を用い、格情報が談話においてトピックとしてどのような役割を果たしているかを分析する。最後に、第5節で結論をまとめる。

1. 情報構造におけるトピックと省略・明示

(1) 情報構造とトピック

まず本稿で取り扱う情報構造の概念に触れておく。情報構造とは、「文文法の一部で、事態の概念的表出としての命題が、語彙文法構造と組み合わされるもので、ある談話で、この情報を使用し、解釈する対話者の心的状態と一致するもの (Lambrecht 1994:5) ⁷」である。Lambrecht (ibid.) は、「前提と主張」「確認可能性と活性化」「トピックとフォーカス」の概念を用いて情報構造を説明している。「前提と主張」は、旧情報と新情報のように、話し手が発話の際、当該情報について既知であるか未知であるかの判断で区別される (ibid.:51-53) と述べ、「確認可能性と活性化」について、話し手が聞き手の心的状態を仮定した上で談話の情報構造を構築している (ibid.:77-103) ことから位置付けられると指摘した。また、「トピックとフォーカス」の概念について、「トピック」は文構成の中で、話し手が現在話題にしている事柄であり、「フォーカス」は話し手が聞き手へ伝えようとしている事柄である。この中でトピックは、情報管理の方法として最も重要とされている概念であるが、『「これから・・・について述べます』と示している部分 (角田 1991:168)』を指す。

(2) 情報構造における省略と明示

話し手は、適切な情報の価値を、ある言語形式を使って表すことで情報管理をしている。その際、実際の談話では、文法的な構造が全て具現されるのではなく、適宜省略されていることが多い。特に、談話の登場人物を指示する表現は、「ゼロ化されることが普通であり、ゼロ化代名詞の指示対象は、それが使用された発話環境に依存して決定される (堂坂 1994:768)』とされる。

つまり、このような情報構造において、省略とは、元々持っている文の要素の中で、ある要素が省かれることである。省略の原理については、「省略される要素は残される要素より情報の重要度が低いものでなければならない (中右・神尾・高見 1998:135)』という特徴がある。以下の例を見られたい。

3) A: 君は、朝6時に起きるんですか。

B: *はい、(私は) φ起きるんです。

(中右・神尾・高見 1998:136、「*」の非文マークは先行研究による)

上記の例の答え B が不自然となるのは、A の求めている情報が「朝6時に」起きるかどうかという情報であり、「起きる」ことに対しての情報の重要度は低いためである。つまり、重要度が高い情報は、省略されにくいこととなる。

授受表現の基本構造については前節で述べたが、実際に授受表現の使用を観察した結果、必ずしも基本構造の要素のすべてが明示されるわけではないことが分かった。例4) を挙げながら説明する。

⁷ 小野 (2005:7) による和訳を示すが、原文は以下の通りである。

・ INFORMATION STRUCTURE: That component of sentence grammar in which propositions as conceptual representations of states of affairs are paired with lexicogrammatical structures in accordance with the mental states of interlocutors who use and interpret these structures as units of information in given discourse contexts (Lambrecht, 1994:5).

4) (話し手: 40代女性)

映画っていうのは本当に人間を成長させる為に非常にいい。学校では教えてもらえないね。色々な勉強を教えてくれるものだと思うんで、是非皆さんも映画をですね、一本でも多く見ていただきたい。

(『日本語話し言葉コーパス』)

例4)のように、「学校では(誰が)(誰に)教えてもらえないね」「(誰が)(誰に)色々な勉強を教えてくれるものだと思うんで」「(誰が)(誰のために)見ていただきたい」のように、授受表現の基本的構造の要素のすべてが明示されるわけではない。つまり、授受表現における格情報は重要度の面において低い時に省略可能となる。ここで重要度が低いと思われる要因に、推論が可能な情報であることが挙げられる。つまり、文脈上学校という場所において「教える」ことは「教師が学生に教える」ことが聞き手により推論できるため、省略ができたと考えられる。本稿では推論が可能な情報を省略することがデフォルトである⁸⁾のに対して、なぜ敢えて明示するかというリサーチ・クエスチョンを情報構造の観点から考察する。

まず、省略の条件について考察すると、発話環境によって情報の省略⁹⁾がなされるが、省略できる要因について甲斐(1995)は以下のようにまとめている。

- ・現場指示による省略:話者の感情表出(「(私) お腹がすいたよ」)、誰についてのコメントか、何についてのコメントかがはっきりしているもの(＜部活の練習の後で＞「(今日の練習は) きつかったね」、＜あつという間にご飯を食べてしまった相手に＞「(ご飯) もう食べてしまったの?」)
- ・談話のそれ以前の部分に現れていることによる省略(昨日太郎は学校へ行きました。そして(太郎は)花子と会いました)

(甲斐 1995:2)

すなわち、話し手自身の出来事を言う時かすでに当該事態について言及されている時に、復元可能である情報が省略できる。また、情報構造のレベルでの旧情報と新情報¹⁰⁾で考えると、旧情報のほうが省略されやすいと予想できる。

また、授受表現における省略について、山田(2004)は方向性を表す特性のため(参与者追跡機能)、格情報を省略しても追跡が可能となると述べる。つまり、各授受表現において、主格名詞句と与格名詞句の間における方向性が決まっているため、どの授受表現の類であるかによって、参与者の中でも、主格名詞句と与格名詞句が誰であるかと推論ができることを「参与者追跡」という概念で説明したのである。このような省略の前提には、授受表現における参与者について、話し手と聞き手の両方が既知情報として認識していなければならない点がある。

一方、復元可能である情報であるにも関わらず、明示される例として以下の例が挙げられる。

5) (Yahoo!知恵袋の書き込み)

友達が私に誕生日プレゼントを買ってくれてたんですけど私は買ってなかったんです。

(『現代日本語書き言葉コーパス』)

例5)のように「～てくれる」系の文では、山田(2004)による授受表現の参与者追跡機能により、

⁸⁾ Grice (1989) の協調の原理で発話に必要な情報のみ盛り込むことを量、質、関係、様態の原則で説明しているように、聞き手による復元が可能である情報については省略することがデフォルトであると説明できる。本稿では実際の談話においてこのようなルールが破られ、復元可能である情報の明示がもたらす意義に着目し、分析に至ったのである。

⁹⁾ 省略についての研究をさらに遡ると、久野(1987)では「先行文脈による可復元性」を要因として日本語と英語の省略現象を述べており、聞き手が先行文脈から推定できると話し手が判断した際に可能となると加えている。

¹⁰⁾ 旧情報とは話し手と聞き手が文脈で既に知られている事柄であり、新情報とは聞き手にとってまだ知られていない事柄である。

話し手自身を表す情報であると追跡が可能である。そのため、省略が可能であるはずだが、例 5) のように明示させる要因とはどのようなものであるか探る必要があると考える。

このような考え方は、不要と思われる格情報の明示にはそれなりに価値のある言語活動であるという認識がその根底に存在する。ただし、談話のレベルで情報構造を調べるためには、一文のレベルを越え、談話¹¹⁾に注目する必要がある。復元可能な情報であるかどうかは、前後の文脈から判断できるためである。

2. 本稿の立場

(1) 授受表現における構文要素について

授受表現の構造の要素として、実際に行われる動作を表す「本動詞 (V)」、主格名詞句、与格名詞句がある。「～てあげる」系と「～てくれる」系では、主格名詞句に本動詞の動作主 (= 与え手) が、与格名詞句には受け手が位置する。しかし、授受表現の視点の制約条件により話し手・話し手側の人物で考えると、本動詞動作の受け手は、「～てあげる」系では主格名詞句に、「～てくれる」系では与格名詞句に来ることが分かる。「～てもらう」系は、主格名詞句に本動詞の動作主が位置され、話し手・話し手側の人物が来るとされている。授受表現の構造要素について以下のように表すことができる。

- 6) a. X が Y に V てやる・あげる・さしあげる
- b. Y が X に V てくれる・くださる
- c. X が Y に V てもらう・いただく

(X は話し手・話し手側の人物を指す)

(2) 授受表現における情報構造

各授受表現はそれぞれの視点の制約を持つが、話し手がどちらの視点を用いるかという問題は、話し手自身が授受表現の経験者として関わる場合と、そうでなく第三者の観察者として関わる場合を分けて考える必要がある。第三者の観察者として授受表現が使用される場合、格情報は文脈もしくは明示することにより明確にしなければならないが、話し手が経験者として動作の与え手か受け手の立場である場合には明示する必要がない¹²⁾。その際、「～てあげる」系では、話し手自身は主格名詞句に相当し、本動詞の動作主であることが分かる。次に「～てくれる」系では、話し手自身は与格名詞句に相当し、受け手の役割をする。最後に「～てもらう」系では、話し手自身は主格名詞句に相当し、本動詞の受け手の立場となる。

このような授受表現の基本構造から、授受表現は他の表現とは異なり、格情報における視点の情報、つまり話し手が主格名詞句と与格名詞句のどちらかに立って事柄を眺めているかが分かるため、言及しなくても復元が可能となる。

- 7) (先日聞き手 B が話し手 A に手作りのマフラーをプレゼントした。久しぶりに会った二人の会話の中で A の言葉)
 - a. この前編んでくれたマフラー、とても暖かかったよ。ありがとう。
 - b. この前私のために編んでくれたマフラー、とても暖かかったよ。ありがとう。
 - c. ??この前編んだマフラー、とても暖かかったよ。ありがとう。

(筆者による作例¹³⁾)

¹¹⁾ 本稿では談話について、狭義のディスコースとし、一つのテーマを持つ会話の単位とする。談話分析では「文段」「話段」という用語を用いる研究者もいる。

¹²⁾ 話し手自身を表す主格は省略されやすい傾向があるという裏付けとして、廣瀬・長谷川 (2010) は「私的自己中心である日本語は、自己を他者より優位に置くという意味で、自己志向性の強い言語である (ibid.:56)」ため、話し手自身を表す格情報が省略される傾向があると述べている。「うれしい」という感情を表す表現を例で示すと、「うれしい」の主格は、主語が明示されなくても話し手自身であると解釈する。

¹³⁾ 筆者による作例は、日本語母語話者 3 名 (男性 1 名、女性 2 名) により適格性を判断してもらい、少し不自然である文は「?」、かなり不自然である文は「??」と評価してもらい、3 名の判断の平均を表記した。以降、コーパスから得られた用例を用いて筆者が作成したテスト文についても、同じく日本語母語話者に判定してもらったが、テスト文とコーパスの用例を比較し、語用論的意味が異なる文においては「#」と記した。

例えば、例7)のような発話場面では、授受表現を使用することで、例7a)は「編む」の動作が聞き手から話し手に向かって行われたことが分かり、例7b)と解釈されるわけである。もし授受表現が使用されておらず、例7c)の「この前編んだマフラー、とても暖かかったよ」という発話ならば、マフラーを編んだ人は話し手自身と解釈されてしまい、発話場面と相容れなくなる。このように授受表現は他構文とは異なり、視点の制約のため格情報の対象が把握できるという特徴を持つ。そこで、もう一つ、7b)の発話は7a)の発話とどのような差異が見られるかという疑問が残される。

Lambreht (1994)による「前提と主張」の概念を授受表現の構造で考えると、前提は聞き手がすでに知っており復元が可能であると情報で、主張は話し手の発話によって聞き手が分かる情報であるため、構造的に推論が可能である面では、一人称を示す格情報が前提となる。しかし、前提である情報をわざわざ明示することにはどのような狙いがあるかに注目する必要がある。

従来の研究においては、7a)のように格情報を復元する過程に注目されていたが、本稿では、格情報の省略と明示という選択の中で、省略できる格情報を明示することを選ぶことで得られる文脈効果を探る。

(3) 研究方法および研究範囲について

本稿では、日本語コーパスの中で授受表現が現れる談話の中で、各格情報が復元可能であるにも関わらず、明示されている文を含む談話を考察対象とする。特に復元可能である情報の中で代表的なものとして話し手自身の情報が挙げられるが、それがどのような目的で明示されているかを考察することによって、談話の情報構造においてトピックの提示の役割を果たしていることを主張する。

使用するコーパス・データは、『現代日本語書き言葉均衡コーパス (以下、「コーパス」とする) から収集した授受表現を含む文とする。コーパスの規模は、総語数が約1億語収録されており、書籍、Yahoo!知恵袋、国会会議録等の媒体が含まれている。データの収集方法としては、『現代日本語書き言葉均衡コーパス』は『NINJAL-LWP for BCCWJ』のオンライン検索システム(「用例収集に利用したコーパスおよびウェブ・ページ」を参照)を利用した。

さらに、授受表現の使用の様相については、「私が説明してあげるよ」のように授受表現が単文で使用される場合と、「私が買ってもらったのは万年筆だった」のように連体修飾として使用される場合がある。また、「私のためにわざわざ来てくださり、ありがとうございます」のような連用修飾節としての使用、そして「私は彼女に来てもらえるかと聞かれた」のように引用節で使用されている例文も授受表現における復元可能な一人称の格情報として分析の対象とした。

3. 分析結果 I : 授受表現における構文的要素の出現傾向

コーパス調査により得られた授受表現は、「～てあげる」系は1,302用例(「～てやる」文が1,167用例、「～てあげる」文が34用例、「～てさしあげる」文が101用例)、「～てくれる」系は110,847用例(「～てくれる」文は57,548用例、「～てくださる」文は53,299用例)、「～てもらおう」系は40,764用例(「～てもらおう」文は24,163用例、「～ていただく」文は16,601用例)が出現した。

(1) 授受表現と本動詞のコロケーション関係から

出現用例の中でも、本動詞と授受表現のコロケーション¹⁴関係において、MIスコア3.0以上¹⁵で、かつ、頻繁に出現していた16動詞をそれぞれ抽出した。その後、国立国語研究所(1980)の動詞の意味¹⁶を分類基準とし分類分析を行った。今回の調査では、「動作・作用の属性」「主体」「相手」「評価」「意図」「結果」「対象」の7つの動詞の意味の類が出現した。分析結果を以下の<表1>に示す。

¹⁴ 本稿では、コロケーション(共起関係)について、ある語と語が同時に出現する頻度を表すこととする。コロケーションは、共起の有無の判断ではなく、強弱の程度で表す。

¹⁵ MIスコアとは、「任意の語が与えられたとき、どの程度、その共起語が予測できるかという指標(石川2006)」で、二つの語句の間で有意な組み合わせであるかどうか分かるものである。一般的にMIスコアが2以上になると有意であると判断される(石田2008)。

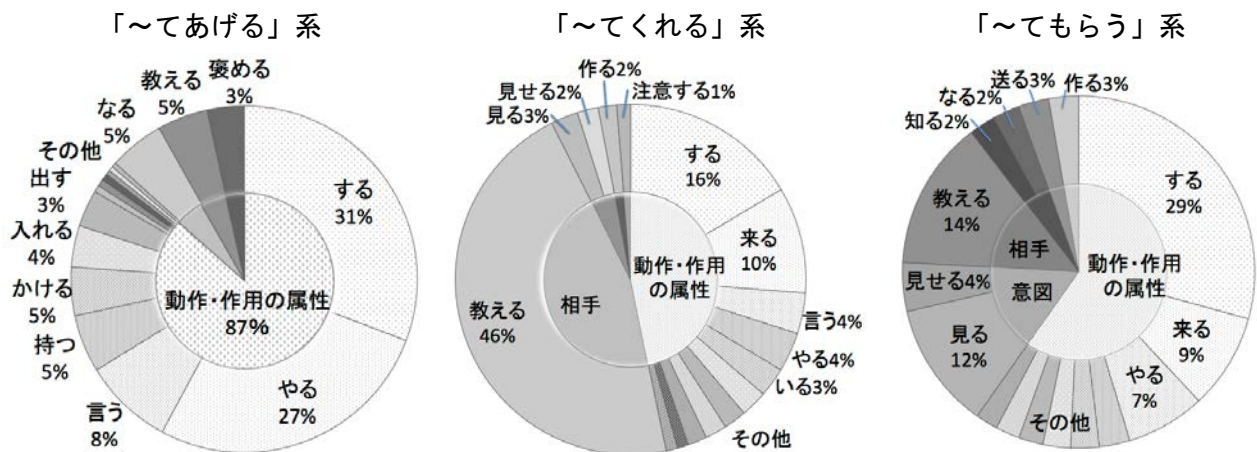
本稿でまずMIスコア2以上の用例を対象に調査を行ったが、合計用例数が1件のみでMIスコアが2以上となるケースが多く見られた。1件の用例で一般化する危険性を避けるため、本稿ではMIスコア3以上の用例を分析対象とした。

¹⁶ 「動作・作用の属性」「主体」「相手」「評価」「意図」「結果」「対象」の説明については、国立国語研究所(1980)の「動詞の意味・用法の記述的研究」を参照した。

＜表 1＞ 本動詞とのコロケーション関係から見た授受表現の使用の様相（単位は実数）

「～てあげる」系			「～てくれる」系			「～てもらう」系		
動詞分類	動詞	用例数	動詞分類	動詞	用例数	動詞分類	動詞	用例数
動作・作用の属性 (86.7%)	する	143	動作・作用の属性 (46.7%)	する	6,942	動作・作用の属性 (59.8%)	する	3,212
	やる	126		いる	1,149		来る	962
	言う	39		やる	1,530		やる	795
	持つ	25		来る	4,148		買う	308
	かける	21		言う	1,596		出す	286
	入れる	18		頑張る	1,039		行く	278
	出す	16		あげる	887		聞く	246
	見つける	3		話す	738		書く	244
	作る	3		確認する	444		入れる	224
	遊ぶ	3		行く	441		教える	1,501
	起こす	2		与える	844		見る	1,276
	買う	2		教える	19,370		見せる	491
	あげる	2		見る	1,064		知る	266
主体 (5.2%)	なる	24	意図 (4.5%)	見せる	822	主体 (4.9%)	なる	271
相手 (4.7%)	教える	22	結果 (1.7%)	作る	718	対象 (2.8%)	送る	307
評価 (3.4%)	褒める	16	評価 (1.3%)	注意する	537	結果 (2.7%)	作る	300
合計	465		合計	42,269		合計	10,967	

本動詞の分類基準としては、その意味を中心にするが、参考として国立国語研究所（1980）の分類基準を援用して分析を行った。本動詞との共起関係から見た授受表現の使用について、＜図 1＞のグラフに示すが、「～てあげる」系、「～てくれる」系、「～てもらう」系に共通に使用されている動詞の類は「動作・作用の属性」に関する動詞が大きい割合で使われている点である。



＜図 1＞ 授受表現とコロケーション関係である本動詞の使用割合

動詞の意味属性を中心に見ると、「～てあげる」系は、「動作・作用の属性」の類の動詞が多くを占めており、「～てくれる」系では「相手」の動詞が多いことが分かった。また、「～てもらう」系においては「動作・作用の属性」の動詞が多いことには変わりはないが、より多様な意味の動詞との共起関係を確認できた。

（2）授受表現における格情報の明示と省略について

本節では、授受表現の構文要素の中でも、格情報についての分析結果を述べる。まず、各授受表現における主格名詞句と与格名詞句の明示と省略について、以下のような結果が得られた。

<表2>の結果から分かるように、授受表現における格情報の明示・省略の面については、授受表現の構造としては主格名詞句と与格名詞句が想定されるが、実際の使用においては、現れないことが多い。「～てあげる」系では、主格名詞句の省略が87.1%、与格名詞句の省略が77.0%である。また、「～てくれる」系は、主格名詞句の省略が89.7%、与格名詞句の省略が87.7%占めており、「～てもらおう」系は、主格名詞句の省略が94.4%、与格名詞句の省略が72.7%である。授受表現における一人称の格情報で考えると、「～てあげる」系の主格名詞句の明示・省略の割合(12.9%:87.1%)と「～てくれる」系の与格名詞句の明示・省略の割合(12.3%:87.7%)に比べ、「～てもらおう」系の主格名詞句の明示・省略の割合(5.6%:94.4%)においてその差が顕著である。その要因については、各授受表現がどのような発話場面において使用されているかとの関係があると思われる。今回の調査においては、「～てもらおう」系が「～てあげる」系と「～てくれる」系に比べ、聞き手への直接的な質問形式による依頼の場面が多かったことから、その差の要因が予測できる。

<表2> 授受表現における格情報の明示と省略のまとめ(単位は実数)

「～てあげる」系				「～てくれる」系				「～てもらおう」系			
主格名詞句 「X」		与格名詞句 「Y」		主格名詞句 「Y」		与格名詞句 「X」		主格名詞句 「X」		与格名詞句 「Y」	
明示	省略	明示	省略	明示	省略	明示	省略	明示	省略	明示	省略
60	405	107	358	4,348	37,921	5,210	37,059	615	10,352	2,993	7,974
12.9%	87.1%	23.0%	77.0%	10.3%	89.7%	12.3%	87.7%	5.6%	94.4%	27.3%	72.7%
「～てあげる」系用例数		465		「～てくれる」系用例数		42,269		「～てもらおう」系用例数		10,967	

(%は小数点一桁まで記す)

構文上想定される授受表現の主格名詞句と与格名詞句の両名詞句ともに明示されるよりは省略される現象が多いことが明らかである。その要因については、談話における基本的原理から考えることができると思う。

まず、省略の条件について述べる。省略は、視点を変えれば、非標示とも言えるが、本稿では授受表現の文構造から想定できる格情報が標示されていない現象を省略と見ている。談話における省略の条件と最も関連性を持つ理論は、Grice (1991) の「協調の原理」の中に見られる「簡潔な言い方をする(不必要に余計なことは言わないこと)」であると思われる。つまり、復元可能性のある情報に関しては言及しないことが望まれるのである。このような復元可能性という観点は、話し手と聞き手のお互いが認識しており、判断できる情報であるということを前提としている。

8) iTunesに入れるにはどうすれば良いのでしょうか? 教えてもらえると助かります。

(例1を再掲)

例8)のように、ネット上にある情報の提供を求めたり、行ったりする発話場面において、「教えてもらえると助かります」と「誰が」「誰に」という情報を表さない理由は、話し手と聞き手(ネット上では、書き手と読み手となる)がお互い「書き手の私が、読み手のあなたに教えてもらえると助かります」という意味が自明と判断しているためである。言い換えると、聞き手にとって復元可能な情報であるためである。

一方、省略されていない情報、つまり明示された情報について考察すると、省略現象とは逆の理由から明示されていると考えられる。まず、聞き手の主格情報を探り出すことができないと、話し手が判断した場合である。

9) (A: 姉、B: 妹)

A05: 彼女ってこの前、彼に振られたんだって。

B06: え、本当? どうして?

… (中略)

A20: そういうこと。あ、そう言えば、成績のこと、ちゃんと話してくれた?

B21：うん？誰に？
 A22：お父さんによ、お父さんに。
 B23：あ、それがまだ…。

(ドラマ『オヤジい』(2000) TBS)

例9)で、A20の発話において「誰が」「誰に」話すかという情報が含まれていないが、B21では、「誰に？」という発話で聞き返している。「誰が」という情報は「～くれたか？」という疑問形式から、聞き手であるB自身であることがわかるため質問していない。しかし、「誰に」という情報については、「あ、そう言えば」という話題転換から、復元できる情報が与えられていないため、文の結束性が欠如している。ここで結束性は、聞き手が復元できるように情報を伝えることと関わっているが、言い換えると聞き手が復元できない情報は伝える必要があることになる。例9)ではBがAに「誰に？」と聞き返しており、情報の復元ができていないことが分かる。このように、格情報の明示において、復元可能性の低い情報は、新情報として求められることになる。

しなしながら、コーパス調査で現れた授受表現の中で、明示的に示された各情報について、以下の<表3>のように、情報の復元可能性が高く、新情報でもない対象が含まれていることが指摘できる。

<表3> 授受表現において明示された格情報のまとめ

「～てあげる」系		「～てくれる」系		「～てもらう」系	
主格名詞句「X」	与格名詞句「Y」	主格名詞句「Y」	与格名詞句「X」	主格名詞句「X」	与格名詞句「Y」
おれ、私、自分、 <u>【人名】</u> 、 <u>【組織】</u> 、おまえ、親、母、父、女性、男…	子供、友だち、人、 <u>【人名】</u> 、相手、あなた、彼女、先生、夫婦…	<u>【人名】</u> 、人、彼、先生、あなた、彼女、相手、 <u>【組織】</u> 、家族、奥さん、神様…	<u>私</u> 、 <u>僕</u> 、 <u>人</u> 、 <u>【人名】</u> …	<u>私</u> 、 <u>【人名】</u> 、 <u>僕</u> 、 <u>自分</u> 、あなた、男、先生、 <u>【組織】</u> …	皆さん、先生、人、お客様、 <u>【地域】</u> 、 <u>【人名】</u> …

(一人称を表す語の下線は筆者による¹⁷⁾)

<表3>からわかるように、授受表現を使用する際には、人間や組織を表す名詞句が標示されることが多い。下線の部分のように、一人称である話し手自身を表し、復元可能性が高い情報であるにもかかわらず明示されている例に注目したいと思う。つまり、格情報の明示は、復元可能性のみで説明しきれるものではなく、実際には複雑な仕組みで会話が成り立っていると言える。

次節では、一人称が格情報として明示されている用例を中心に、格情報の明示の条件についての分析過程を述べる。本稿で取り扱う主な一人称には、「私、僕、おれ、あたし、自分(話し手志向)」があり、授受表現との関わり方を探る。このような一人称の中でも、「私」を典型例として取り上げ、授受表現の視点制約の条件から、「私が～てあげる」系、「私に～てくれる」系、「私が～てもらう」系を分析対象とする。

4. 分析結果Ⅱ：授受表現における一人称を示す格情報の明示

本節では、分析結果Ⅰで得られた用例の中で一人称を格情報として明示する必要性とその文脈効果について考察する。まず、談話におけるトピックの役割として一人称の格情報の明示が必要となる場合について述べ、次に一人称の各情報の明示による文脈効果について記述する。

(1) 一人称を示す格情報の明示に対する必要性：トピックの階層性・継続性を中心に

授受表現において、一人称を表す格情報をどのような条件の下で明示しているかについて、コーパスから得られた用例を挙げながら、検証する。まず、「私が～てあげる」系の中、話し手自身のことが明示されている例は次の例10)のような例が挙げられる。

10) (話し手：主婦、あの子：娘、彼：娘の婚約者、談話の性格:語り)

¹⁷⁾ 【人名】の中には一人称を指すケースもあったため、下線で示している。

最後に、じゃ、二人で旅行した時もですね。もう今まではちょっとあの子はちょっと腰が痛かったりするんで逆に私が荷物を持ってあげたりはしてたんですけども、何か彼の一言が、きつとお母さんだつて疲れてるのに持ってくれてるんだよっていうことを聞いたらしいんですね。で、それから何か私をいたわるような気持ちになって、いいよいいよ、ママ、持てるからって言って、(後略)

- a. 荷物を持ったりしてたんですけども (後略)
- b. # φ荷物を持ってあげたり (後略)
- c. 私が荷物を持ってあげたり (後略)

(「コーパス」)

授受表現を用いない例 10a) では、「あの子は」が文全体の主題であり、次の節にも影響を与えている。そのため、そのまま引き継がれると、荷物を持つ行動を「あの子」が行ったことになってしまう。それで、「腰が痛い」人物と「荷物を持つ」人物との関係を表すために授受表現が使用されることになるが、ここでは視点の制約のため「私が～てあげる」系が選択される。例 10b) のように「私が」を省略せず、例 10c) のように主格名詞句として明示したのは、前節でトピックとして示された「あの子」という上位トピックがそのまま「荷物を持つ」の行動主に引き継がれることを避け、別の人物であることを示す必要があるからである。

「あの子」のように談話全体のトピックであり、談話に複数存在するトピックの中で話し手のもっとも伝えようとする話題を上位トピックと言う。それに対して特定の範囲内で部分的に働くトピックを下位トピックと言う。談話は話し手が話そうとするもっとも根本的な話題として一つの上位トピックと、複数の下位トピックが存在し、階層性を持つ。階層性において上位トピックと下位トピックを決める要因は、談話の伝達内容の中核に当たるほど上位トピックとなる。

例 10) に対する解説に戻ると、上位トピックである「あの子」に対して「私」が下位トピックとして区別される。また普段であれば娘のほうが荷物を持つがその反対に母である自分が持つことを表す意味として「私が～てあげる」系が使われており、「逆に」という表現が加わることでさらに話し手自身をトピックとして表そうとしていることが鮮明なものになる。

11) (話し手：女性、聞き手：知り合いの女性、小説の会話)

私も変だと思ったの。私を送って下さる時、ロバートと会って、どう思うか私に教えて下さい。

- a. # どう思うかφ教えて下さい。
- b. どう思うか私に教えて下さい。

(「コーパス」)

例 11) では、「私に～てくれる」系の例であるが、ここで「私に」を明示せず発話した例 11a) は、前節で「ロバートと会って」でのトピックが「ロバート」であるため、そのまま引き継がれ、「ロバートに教える」と解釈される恐れがある。そのため、例 11b) のように「私に」という与格名詞句を明示する必要があると言える。つまりロバートというトピック以外の人物に対する動作の依頼であるため、一人称の格情報である「私に」と明示していると解釈できる。

このような例は、「私が～てもらう」系にも出現しているが、次の例 12) を挙げながら説明する。

12) (話し手：国会議員、国会議事録)

つまり、米価というものを毎年上げる、上げる、いや据え置きだ、下げるなんてとんでもない、こういう議論がずっとありました。私が議席を与えていただいている八年間、ずっとそういうことで夏は幾晩も徹夜をしまりました。

- a. φ議席を与えていただいている八年間、徹夜をしまりました。
- b. 私が議席を与えていただいている八年間、徹夜をしまりました。

(「コーパス」)

次の例 12a) では、「～ていただいている」と授受表現「～てもらう」系を用いているため、主格名

詞句を明示しない場合には、話し手自身もしくは話し手側の人物が想定できる。例 12a) のように主格名詞句を省略せず、例 12b) のように明示したのは、前の文でのトピックである「議論」から、「議席を与えていただいた」「徹夜をしてみいました」の行動主である「私」にトピックが移っているためであると思う。つまり上位トピックと下位トピックとの区別を入れなければ、後文の主体が誰を示しているか曖昧となる。例えば、8年間議員として徹夜を共にしてきた仲間も含めて話し手側として想定する可能性もある。このように「確認可能性」が低いと判断される一人称の各情報は明示されることが検証できた。

13) (Yahoo!知恵袋の書き込み、話し手：不明、談話の性格：助言・アドバイス)

梅田のかっぱ横丁にある占いはよく当たりますよ。色んな占い師さんがいて、私が見てもらった人は皆当たっていました。

a. # 私が見てもらった人は皆当たっていました。

b. 私が見てもらった人は皆当たっていました。

(「コーパス」)

例 13a) のように格情報を明示しない場合には、「見てもらった人」の対象が話し手もしくは話し手側の人物と解釈され、「占い師に見てもらった人」となる。しかし、例 13b) の「私が見てもらった人」の場合は、占い師と解釈される。つまり、ここでは「私が」を明示しなければ逆の意味として捉えられてしまう。その理由は、上位トピックが前節で「色んな占い師さん」と提示されており、後節のほうまで影響力を持っているためであると説明できる。そこで、当該文のトピックとして「私が」を明示する必要があるわけである。

14) (話し手：不明、小説)

でも、わたしはそれにこたえてあげられなかった。彼女に説明した。

(「コーパス」)

15) (Yahoo!知恵袋の書き込み、話し手：不明、談話の性格：助言・アドバイス)

店員さんが忙しそうで聞くこともできない、小心者の私に教えてくださいませんか。ちなみに、おすすめのアルバム名も教えていただけると嬉しいです。

(「コーパス」)

「私が～てあげる」系の例 14) でも、「私に～てくれる」系の例 15) でも、授受表現を含む文でトピックとして提示された一人称を表す名詞句が、後接する文にまでトピックとして働いていることが共通して確認できる。例 14) の後文は、「わたしが彼女に説明した」の意味となり、例 15) では、「私が嬉しいです」という意味につながる事が分かる。次の例は、「私が～てもらおう」系において話し手が主格名詞句として明示された例である。このように、前の文・節で示されたトピックが後の文・節までに影響を与える性質を、トピックが継続性を持つと説明できる。前に示されたトピックは、その後、他のトピックの提示がなければそのまま継続的にトピックとしての役割を担うことになる。

16) (話し手：40代女性、談話の性格:語り)

例えばですね、私が今ちょっと仲良くさせていただいてるのは、ちょうど母の年代よりも上のくらいの人と、後そのもう一歩上のくらいの人、お店を持ってらっしゃる方とか、後そういった市場で週末だけお店を開いてらっしゃる方とかで、そういった人ともこう交流ができてどんどん情報交換をして、それで、自分の知らなかった骨董のこの良さを教えてもらったり、とか、逆にこんなに年が違うのに、おんなじのいい渋いと感じるとか、何と言うか、こう、自分の中のわび寂を再認識する面白い出会いがあります・・・(中略)

a. 私今ちょっと仲良くさせていただいてるのは、(後略)

b. 私が今ちょっと仲良くさせていただいてるのは、(後略)

(「コーパス」)

上記の例 16) では最近の出会いについて語っているが、例 16a) は省略された主格の情報が話し手自身であることは確認可能性が高いものである。しかし、例 16b) との違いを見てみると、後続する文において「情報交換をする」「骨董の良さを教えてもらう」「いい渋いと感じる」「わび寂びを再認識する」といった述語が続いており、このような述語の主体となる対象は話し手自身であることが分かる。そのため、「私が」と主格としての格情報を活性化させることで、後接する表現の主体がより明確になる。文全体の上位トピックは「は」でマークされている「仲良くさせていただいている方」であるが、その下位トピックとして「私が」を明示させ、後続する述語まで働き続けている点にトピックの継続性が現れていると言える。

談話において一人称の格情報を明示する条件について、情報構造のトピックの性格と関連付けて検証した。上位トピックとしてすでに話し手以外の人物や事柄が出されている場合、下位トピックとして一人称の格情報を提示する必要があるとまとめられる。Lambrecht (1994) で述べられた「前提と主張」の概念を用いると、「前提」の情報であった一人称を示す格情報が談話において「主張」として働く際、明示する必要があると説明できる。また、明示された一人称の格情報が、授受表現の後節や後接文においても影響を与え続けていることについてトピックの継続性であると説明した。

(2) 授受表現における一人称の格情報の明示から得られる文脈効果：対比と限定

本節では、授受表現における一人称の格情報の明示により得られる文脈効果について検証するが、一人称の格情報の確認可能性が高いため、省略が容認される用例を用いながら、どのような働きをしているかに注目する。

17) (話し手：相談の受け手、聞き手：相談した者、談話の性格：助言・アドバイス)

ただ自分と相手がどっちが惚れているかということとはよくあると話とは思いますが、僕の場合は、自分がとても惚れていて彼女に優しくしてあげます。プレゼントをあげたり花を贈ったり、いろいろ自分がしてあげたくなりますが、その場合、言い方は良くありませんがハッキリ言うと、彼女が図に乗ってしまいます。

- a. いろいろどしてあげたくなりますが、(後略)
- b. いろいろ自分がしてあげたくなりますが、(後略)

(「コーパス」)

例 17) では、前の文脈からトピックが話し手自身である「僕」に当てられていることがわかる。そのため、「自分が」という一人称の格情報を必ずしも明示しなければならないものではない。しかし、あえて明示することで、後節に続く「図に乗ってしまう」対象である「彼女」との対比が強調されるという効果が生まれる。つまり、「自分」が優しすぎると、「彼女」が図に乗ってしまうというふうに動作の主体を明確に対比させることができる。この明確さが、話し手が聞き手への助言に対する説得力につながるのである。

次に、授受表現における一人称の格情報の明示により、当該トピックを限定させ、話し手が伝えようとしている心的態度や感情をより効果的に伝える文脈的效果について述べる。例 18) は、助言を求めている場面で、話し手自身の行動についての言及という面では、話し手を表す格情報の省略が可能であるが、助言を求めている主体が話し手自身であることを明確に示すことで、切実に助言を求めている話し手の感情を聞き手へ伝えるのに効果的な手段であると思われる。

18) (Yahoo!知恵袋の書き込み、話し手：不明、談話の性格：助言・アドバイス)

二人とどう過ごすかで最近特に毎日が憂鬱になってしまっています。子供とどう遊んであげればいいのか私はどうしてあげればいいのか毎日悩んでいます。三歳なのにいちおは話せますが、言葉をまだ理解していなく言っても分からない言っていることもよく分かりません。

(「コーパス」)

19) (話し手：不明、談話の性格:語り)

最後に、私の好きな言葉で締めたいと思います。これは私が高校三年生の時に大好きな国語の先生が、私に送ってくれた応援の言葉です。私はこの言葉を胸に秘め大学受験会場に向かいました。そして志望校に合格することができました。今もなお挫けそうになった時など、必ずこの言

葉を、この言葉は私を元気にしてくれます。

- a. 国語の先生が、私に送ってくれた応援の言葉です。
- b. 国語の先生が、私に送ってくれた応援の言葉です。

(「コーパス」)

例 19) では、「国語の先生が私に送ってくれた」が「応援の言葉」を修飾しているが、「私に」の与格名詞句で言い表さなくても話し手自身もしくは話し手側の人物を指していることは分かるため、確認可能性が高い情報であると言える。ここでは聞き手による推論が可能な与格名詞句の範囲を話し手自身に制限することで、「応援の言葉」に対する話し手の気持ちが強く表出される効果があると思われる。つまり、「私に」を省略した例 19a) では、私だけではなく、私を含むグループ、例えば他の生徒たちのことまで範囲が広がるが、ここで敢えて話し手自身に制限することでより先生の言葉を受け止めている気持ちが現れると思う。このように格情報を限定することは話し手の感情を表出することと関連があることが分かった。

20) (話し手：女性、談話の性格：回想・語り)

弟は非常にやさしい、気のいい子で、私たちは毎日犬ころのようにたわむれていました。彼は、自分の我を捨てても私に尽くしてくれました。そんな性格が霊になってからも継続的に働いています。

(「コーパス」)

例 20) において、「彼」と人物を回想しながら、彼の人柄について語っている場面で、「私に」という与格名詞句を明示することで生まれる効果は、話し手自身にどのような意味であったかを説明するという点で、話し手の感情表出につながっていると思う。

このように一人称の格情報を明示することで、既存のトピックとの対比を表し、トピックを限定することが話し手の感情表出に結びつけることができる根拠として、一人称の格情報を修飾する表現との共起が挙げられる。

21) (Yahoo!知恵袋の書き込み、話し手：不明、談話の性格：助言・アドバイス)

無知な私に教えてください。知恵袋の中に何回か出てきました郵便局の1口1000円の裏ワザとは何のことでしょうか。

(「コーパス」)

22) (Yahoo!知恵袋の書き込み、話し手：不明、談話の性格：助言・アドバイス)

また繰り返してしまうと嫌です。こんな僕に喝を入れてください。元カノが恋しくなるんじゃないかな～

(「コーパス」)

23) (話し手：男性、小説の会話)

いーい？今からこのワタシが教えてあげるから、耳の穴かっぼじってよく聞きなさい。

(「コーパス」)

24) (話し手：男性、小説の会話)

そんなこともわからんのか。では、天才であるこのわしが説明してやろう。

(「コーパス」)

一人称を表す表現と共起する表現として、例 21) の「無知な私」、例 22) の「こんな僕」、例 23) の「このワタシ」、例 24) の「天才であるこのわし」が出現した。例 21) の「無知な」、例 22) の「こんな」は話し手自身のことをへりくだることで、依頼される相手への行動を促す効果があり、例 23) の「この」、例 24) の「天才であるこの」は、話し手自身の性格をアピールし、威張っているニュアンスを付加することで、話し手の伝達態度が把握できる。つまり、例 23) と例 24) においては聞き手に対して「上からの目線」の構造を表している。どちらも聞き手の注意を引くためのものであり、トピックとして提示している一人称の格情報の明示により、話し手が発話を通して伝えようと思っている発

話意図をより効果的に伝えることができると考えられる。

(3) まとめ

以上のように、授受表現における一人称の格情報の明示について、他のトピックと区別する必要がある格情報は一人称を表すものであっても「主張」として明示しなければならないことが分かった。トピックの階層性と継続性の性質を用いて、一人称を表す格情報の明示を必要とする用例を分析した。また、一人称を表す格情報において確認可能性が高い情報に対しても、明示することによって得られる効果についてはトピックの対比と限定で検討した。聞き手による推論が可能なトピックを取り上げ、他のトピックと対比させ、推論できるトピックの範囲を限定することは、格情報の省略による推論の曖昧さを解消し、話し手の伝達態度が窺える根拠につながる。

5. おわりに

本稿では、授受表現の構文的研究でなされてきた基本的構造が、言語運用という談話的研究の視点からどのように使われているかに注目した。授受表現の構文要素の中、話し手自身を示す格情報は聞き手による確認可能性が高いため省略されることが多いが、それにも関わらず、格情報が明示される要因には、トピックとしての働きによる文脈効果があると述べた。その文脈効果の根底にあるトピックという概念は話し手が話そうとしている話題を指すが、復元可能な格情報の明示は、当該情報を活性化させる働きがあり、話し手の感情表出のように伝達態度と関係があると思う。特に授受表現はそれぞれ話し手志向の格情報が決まっており、一人称を示す格情報を言い表す必要性が低くなっているが、実際には談話においてトピックとして働くことを条件に明示されることが把握できた。

授受表現の使用は様々な発話場面において使われているが、今回のデータでは書き言葉が中心となるジャンルに偏りがあった。ジャンルによって視点移動の自由度が異なると予想されるため、話し手と聞き手の談話シーケンスが確認できるジャンルでの考察については、今後検討していきたい。

参考文献

- 石川慎一郎 (2006) 「言語コーパスからのコロケーション検出手法—基礎的統計値について—」 統計数理研究所共同研究レポート, 神戸大学, pp.1-14.
- 石田基広 (2008) 『Rによるテキストマイニング入門』 森北出版.
- 小野正樹 (2005) 『日本語態度動詞文の情報構造』 ひつじ書房.
- 甲斐ますみ (1995) 「省略のメカニズム—談話の構造と関連性および聞き手の推論を中心に—」 『岡山大学留学生センター紀要』 3, 岡山大学留学生センター, pp.1-18.
- 久野暉 (1987) 『談話の文法』 第6版 [初版 1978], 大修館書店, pp.5-124.
- 古賀悠太郎 (2013) 「『視点』研究の枠組みを求めて—移動動詞文を例に—」 『神戸外大論叢』 63-2, 神戸外国語大学, pp.169-188.
- 国立国語研究所 (1980) 『国立国語研究所報告 43 動詞の意味・用法の記述的研究』 第4版 [初版 1972], 秀英出版.
- 国立国語研究所 (2006) 『国立国語研究所報告 124 日本語話し言葉コーパスの構築法』 国立国語研究所.
- 窪田行則 編 (1997) 『視点と言語行動』 くろしお出版, pp.77-117.
- 崎田智子・岡本雅史 (2010) 『言語運用のダイナミズム』 山梨正明 編 『認知言語学のフロンティア』 シリーズ4, 研究社.
- 角田太作 (1991) 『世界の言語と日本語』 くろしお出版.
- 遠山千佳 (2006) 「第二言語における談話の習得:認知語用論的アプローチからの一考察」 『言語文化と日本語教育』 2006年11月増刊特集号, お茶の水女子大学, pp.32-51.
- 堂坂造二 (1994) 「語用論的条件の解釈に基づく日本語ゼロ代名詞の指示対象同定」 『情報処理学会論文誌』 35-5, 情報処理学会, pp.768-778.
- 中右実・神尾昭雄・高見健一 (1998) 「第Ⅱ部 第1章 省略」 『日英語比較選書 2 談話と情報構造』 研究社, pp.114-138.
- 廣瀬幸生・長谷川葉子 (2010) 『日本語から見た日本人—主体性の言語学—』 開拓社.
- 三宅知宏 (2005) 「現代日本語における文法化」 『日本語の研究』 1-3, 日本語学会, pp.61-76.

- 宮地裕 (1965) 『『やる・くれる・もらう』を述語とする文の構造について』『国語学』63, 日本語学会, pp.21-33.
- 山岡正紀 (1990) 「授受補助動詞と依頼行為」『文藝言語研究 言語篇』17, 筑波大学 文藝・言語学系, pp.19-33.
- 山田敏弘 (2004) 『日本語のベネファクティブ―「てやる」「てくれる」「てもらう」の文法―』明治書院.

- Elizabeth Closs Traugott (2010). Gradience, gradualness and grammaticalization: How do they intersect?, Elizabeth Closs Traugott and Graeme Trousdale (Ed.) *Gradience, Gradualness and Grammaticalization*, John Benjamins, Amsterdam. (福元広二 訳 (2011) 「第3章 文法化と(間)主観化」高田博行 他編『歴史語用論入門』大修館書店, pp.59-70)
- Knud Lambrecht (1994). *Information Structure and Sentence form: Topic, focus, and the mental representations of discourse referents*, Cambridge University Press, Cambridge.
- Paul Grice (1991) *Studies in the Way of Words*, 2nd Edition [1st Edition 1989], Harvard University Press, Cambridge, Mass. (清塚邦彦 訳 (1998) 『論理と会話』勁草書房)

用例収集に利用したコーパス・ウェブページおよびドラマ

国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』

http://www.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj (閲覧期間: 2014年4月~2015年9月)

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』のオンライン検索システム『NINJAL-LWP for BCCWJ』

<http://nlb.ninjal.ac.jp> (閲覧期間: 2014年4月~2015年9月)

国立国語研究所『日本語話し言葉コーパス』

http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/csj/ (閲覧期間: 2014年4月~2015年6月)

ドラマ『オヤジい』(2000) TBS